公益財団法人 日本財団 御中

一般社団法人 御代田の根

2024年度 運営事業 活動報告書

2025.4.8

■はじめに

御代田の根は、2021年度 コミュニティモデル型の子ども第三の居場所事業の助成を受け、子どもと大人が一緒になって身近に触れられる自然を感じ、自然の恵みを暮らしに役立てながら生きることが持続可能なコミュニティにつながるとの考えを中心に据えて「みよたの広場」の事業を進めてきた。
誰かの手によって完成され、提供される広場ではなく、かかわる人たちでつくり続け、改善しながら使っていく広場にすることを念頭に置き、次の3点を掲げて場づくりを行なっている。

- 広場が子どもも大人も過ごせる居場所となること
- よい循環を生み出す拠点となること
- 新たな関係を結びなおす場となること

FY2023は「住民主体で運営される広場」に向けて、主体的に運営に関わってくれる住民との関係性づくりにも力を入れて運営を行ってきた。助成最終年度であるFY2024は、主体的に関わってくれる住民との関係性をさらに深め、広場が自律的に運営され続けていくための仕組みづくり（仕組みの検討やトライアル）に注力した。本活動報告書では、それらの実現に向けた活動実績とここまでの成果を報告する。

■活動実績と成果

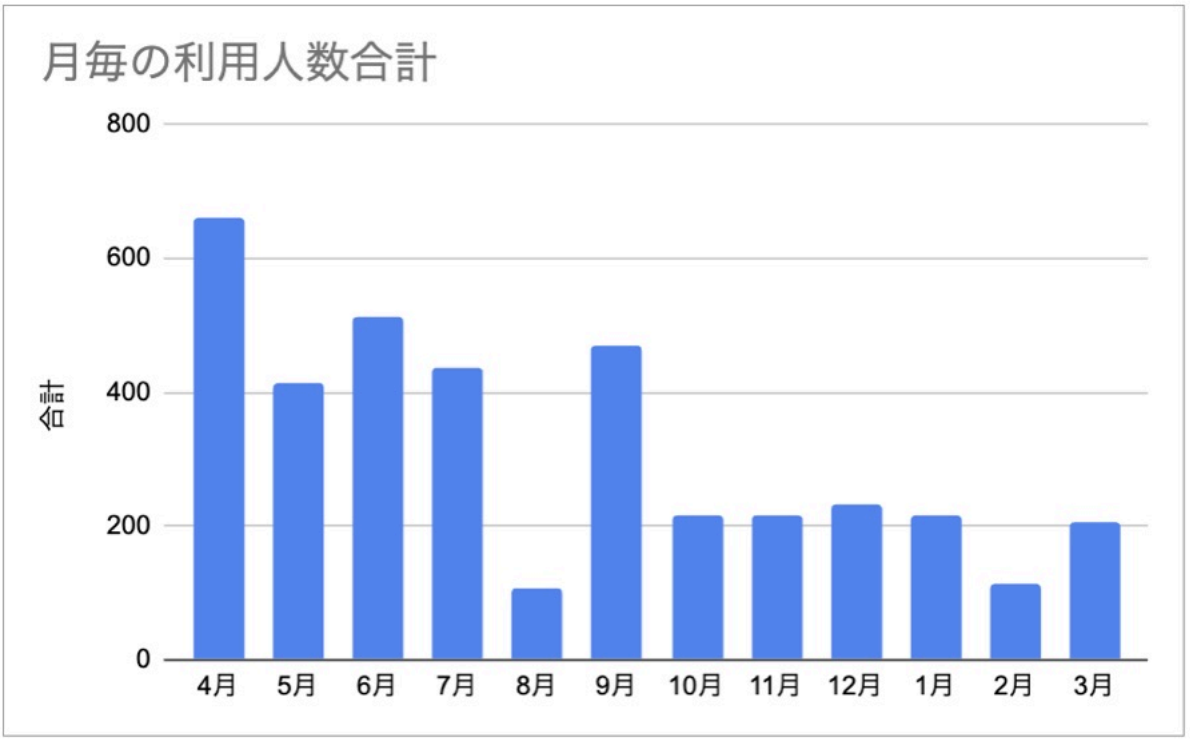
子ども第三の居場所拠点「みよたの広場」運営実績(数字)

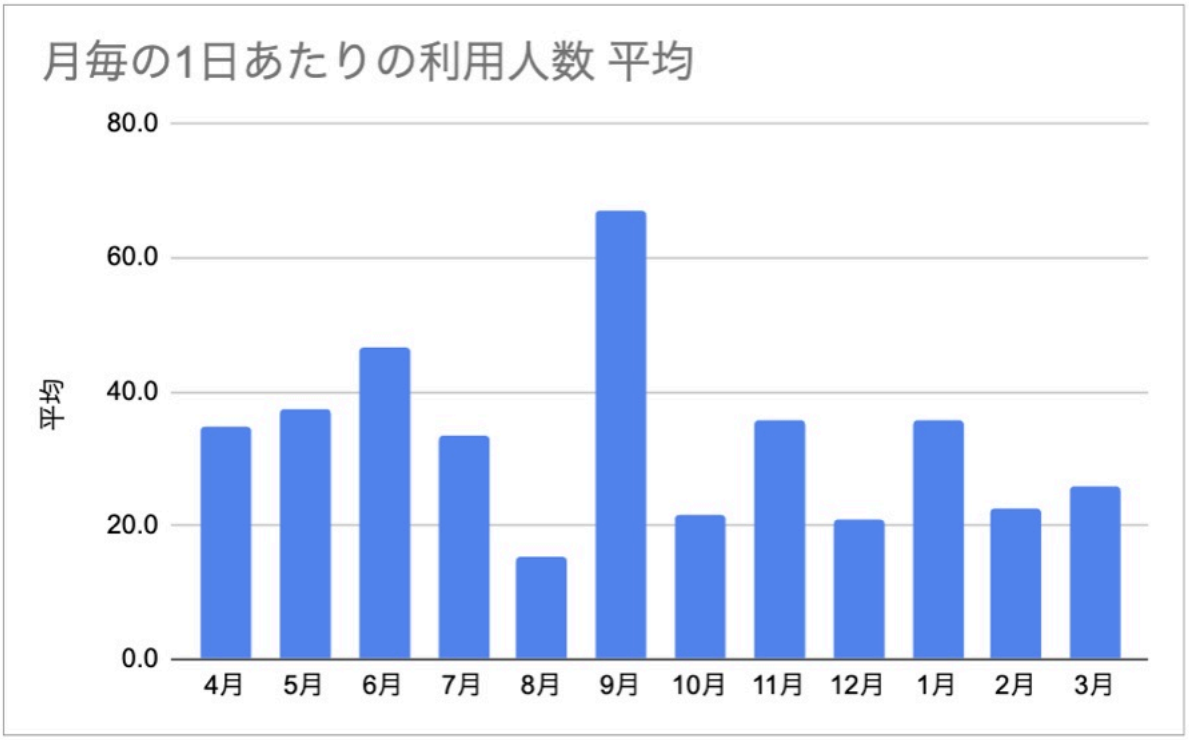
2024年度の1年間累計で、約3800人の方々に利用いただいた(スタッフ滞在時の利用人数のみをカウントした。イベント開催日の参加人数も含む) 。

2024年度は、利用者の多いイベントが天候不良で開催できなかったことを理由に、8月、10月は利用人数が別の月と比べて少なくなっている。一方、11月～3月までは、例年同様寒さの厳しくなる期間であり、利用人数が相対的に少なくなった。

■FY2024 利用者集計

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	Total
合計	660	412	511	435	107	469	216	215	231	215	113	206	3790
平均	34.7	37.5	46.5	33.5	15.3	67.0	21.6	35.8	21.0	35.8	22.6	25.8	33.1





月毎の利用人数合計・平均グラフ

月別の利用人数合計

	児童数								大人						合計
	小学生未満	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学生以上	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	
4月	43	38	47	47	44	48	54	23	15	142	97	32	27	3	660
5月	34	24	23	29	28	13	23	19	30	84	75	18	11	1	412
6月	50	34	33	30	39	28	19	41	10	87	84	36	19	1	511
7月	74	20	21	23	26	16	17	23	20	61	72	25	27	10	435
8月	31	5	6	2	4	1	4	5	4	12	24	5	3	1	107
9月	55	27	20	24	27	22	22	43	37	55	61	32	31	13	469
10月	15	5	15	14	8	30	8	5	10	58	28	10	10	0	216
11月	38	9	11	7	12	5	8	8	9	43	37	10	13	5	215
12月	43	31	17	22	7	0	3	2	0	63	43	0	0	0	231
1月	23	15	45	8	11	11	5	9	4	37	37	0	9	1	215
2月	11	11	6	9	5	5	7	0	4	35	20	0	0	0	113
3月	48	6	14	5	12	6	15	7	3	57	23	2	8	0	206

月別の利用人数平均

	児童数								大人						合計
	小学生未満	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学生以上	20代以下	30代	40代	50代	60代	70代以上	
4月	2.3	2.0	2.5	2.5	2.3	2.5	2.8	1.2	0.8	7.5	5.1	1.7	1.4	0.2	34.7
5月	3.1	2.2	2.1	2.6	2.5	1.2	2.1	1.7	2.7	7.6	6.8	1.6	1.0	0.1	37.5
6月	4.5	3.1	3.0	2.7	3.5	2.5	1.7	3.7	0.9	7.9	7.6	3.3	1.7	0.1	46.5
7月	5.7	1.5	1.6	1.8	2.0	1.2	1.3	1.8	1.5	4.7	5.5	1.9	2.1	0.8	33.5
8月	4.4	0.7	0.9	0.3	0.6	0.1	0.6	0.7	0.6	1.7	3.4	0.7	0.4	0.1	15.3
9月	7.9	3.9	2.9	3.4	3.9	3.1	3.1	6.1	5.3	7.9	8.7	4.6	4.4	1.9	67.0
10月	1.5	0.5	1.5	1.4	0.8	3.0	0.8	0.5	1.0	5.8	2.8	1.0	1.0	0.0	21.6
11月	6.3	1.5	1.8	1.2	2.0	0.8	1.3	1.3	1.5	7.2	6.2	1.7	2.2	0.8	35.8
12月	3.9	2.8	1.5	2.0	0.6	0.0	0.3	0.2	0.0	5.7	3.9	0.0	0.0	0.0	21.0
1月	3.8	2.5	7.5	1.3	1.8	1.8	0.8	1.5	0.7	6.2	6.2	0.0	1.5	0.2	35.8
2月	2.2	2.2	1.2	1.8	1.0	1.0	1.4	0.0	0.8	7.0	4.0	0.0	0.0	0.0	22.6
3月	6.0	0.8	1.8	0.6	1.5	0.8	1.9	0.9	0.4	7.1	2.9	0.3	1.0	0.0	25.8

FY2024 月別の利用人数 年齢別データ

②日々の運営の様子

○子どもスタッフが誕生

毎日のように広場に遊びにくる子どもたちから、何かを手伝いたい！と意思表明を受けることが多かったので、ゴミ拾いなどの掃除に始まり、薪運びなど多少力の必要な現場作業もお願いするようにしていた。そのような声かけがガイドになったのか、子どもたちにとっての広場が「単に利用する場」ではなく、「自分たちの場」に変化し、自分で考え、主体的に行動してくれる子どもが誕生した。

主体性を持って動いてくれる彼らに、「子どもスタッフ」と名前をつけると、これまでのアクションに加えて、小さな子どものケアを行ってくれるようになった。具体的には、赤ちゃんをあやす、寝かしつけ、一人で遊べない小さな子どもの遊びサポート（砂場で一緒に遊ぶ、滑り台の階段を上がるサポート）などをおこなってくれた。そのおかげで親御さんに余裕が生まれ、焚き火を囲んでゆっくり広場のことを話せたり、コーヒーを買ってもらってくつろいで過ごしてもらうことができるようになった。

子どもスタッフの存在をきっかけにリピートしてくれるようになった親御さんもいて、広場らしい、広場の魅力になっている。

常連キッズと遊んでもらう赤ちゃん

③イベント・ワークショップの実施
昨年からの継続イベントで一定の認知を得ていた、みよたの日曜市（マルシェ）、カレーの日、ちいさいひろば、の運営を続けた。それぞれ回を重ねるごとに、これまでとは異なる役割を担うようになってきた。

○みよたの日曜市（マルシェ）
広場をより多くの人に認知してもらうためのイベント。今年度からは、子どもたちが企画した子ども出店が並ぶようになり、拠点周辺に住む子どもたちの実践的アウトプットの場になった。学校の保護者に対してのアウトプットの場はあるが、学校外の大人たちにお披露目する場は稀とのことで学校関係者からも重要な役割と認知していただけた。
子ども出店の内容に大人が伴走することで、わからないことを確認しながらイベントをやりきることができるようになってきた。回を重ねるごとに、大人のサポートを受ける箇所も減ってきて、自律的な運営を行えるようになってきたことから、子どもたちの実践的な経験の機会になっていると考えられる。

子ども出店の様子
商品づくり、呼び込み、会計など役割分担を決めて、チームで営業していた店舗もあった

○カレーの日

毎月1回、集まった子どもと大人でカレーをつくり、一緒に食べる企画。いただいたお米や野菜などを中心に利用し、子どもは無料としている（子ども食堂としても機能）。カレーもご飯も焚き火で調理するため、アウトドアな経験の機会にもなっている。定期的に開催して回を重ねることで、カレーの日の常連さんが出現。この場を通じて大人と子どもの間にも緩やかな関係性が生まれるようになった。少し元気がない子供に、「どうしたの？」「何かあったの？」と声をかける大人がいるなど、家庭だけでは解決しにくい問題を未然にケアする地域子育ての土台が醸成されている。

大人と子どもが混ざって一緒にカレーを食べる様子

○ちいさいひろば

保育士の資格を持っているスタッフに企画してもらい、週1回実施している自主保育の企画（親子が集まり、一緒に遊び、一緒にご飯を食べる）。広場にある自然を生かした自然体験や家ではなかなかやらせられない水遊び・泥遊び、後片付けが気になってやらせられない料理のお手伝いなど、未就学の子どもたちの体験機会を提供できる時間になっている。

教育子育て目的での移住者が多い御代田町では、移住前からみよたの広場、ちいさいひろばの存在を知っている方もいるようで、この場が移住したばかりの方の地域への入り口、情報収集の場のようになっている。認知が広がることで、移住したばかりの方々の暮らしをサポートする役割も担うようになった。

ちいさいひろばには移住したばかりの方の参加も多い

○持ち込みイベント

広場の運営自走に向けて、広場をイベントスペースとして利用してもらい、多様なイベントが持ち込まれる仕組みを構築した。持ち込みイベントと名付けたイベントでは、子どもたちが全身を使って表現するアートワークショップや、広場の資源を有効活用できるみんなの畑PJT、工具が必要になるしいたけのコマ打ち体験会をはじめ、たようなイベントが開催された。
アートワークショップでは、「ペンキ汚れのリスクがあって公園では許可を取りにくい」という課題があったり、自前では電動工具が準備しきれないなどの課題を抱えた方が、広場のリソースを有効活用し、広場らしいイベントを開催してくれていたのが印象的。持ち込みイベントを募ることで、公園とは違う広場の役割を発見することができた。

アートワークショップの様子。全身ペンキまみれで一枚の絵を描く

みんなの畑PJT。プランター作りからはじまり、出来上がった作物は広場に遊びにきた人たちが誰でも食べて良い仕組みに。広場版のコミュニティ農園

しいたけのコマ打ち体験会。子どもと大人で協力して作業を進めた

④住民を巻き込んだ運営体制
これまでに述べてきたような子どもたちの居場所を「どのように維持し続けるか」が2024年度の最大のテーマであり、最も注力したポイント。主体的に運営に関わってくれる住民を増やし、その方々との関係性を深めていくために様々な施策に挑戦した。

○オープンミーティング（昨年度からの継続）
広場の今後のあり方を検討するミーティング。広場の継続に関心を持ってくださる方々が集まり、毎月1回、様々なトピックについてミーティングを行っている。この場が定期的に開催され、会話の機会があること、情報共有があることで、少しずつ広場を介した関係性が育まれ、運営が自分ごとになる住民が増えている。

○ジョージ体験
ボランティア住民が現場スタッフを体験してみる企画。助成終了後の運営を考えるため、オープンミーティングに参加しているメンバーの一人ひとりが現場スタッフの代わりに広場に立ち、現場感覚をつかむことを目的として実施した。現場にたった人の目線で感じられたことがあり、それをベースに、より具体的でリアルな現場運営の形を模索することができた。

○広場づくりの日（拠点メンテナンスのための共同作業日）
みよたの広場に、必要なメンテナンス作業をみんな実施する日。ゴミひろや薪運び、草刈りのような定期的に必要なものから、「広場に橋を増設する」「焚き火スペースのレイアウトを大きく変更す

る」「滑り台のレイアウトを変える」「クラファン支援者の方の名前を掲示する看板を新設する！」などなど、人手が必要な大掛かりなものまで。初めましての人も、子どもも大人も集まって、みんなで時間を共にし、作業の後はみんなでご飯を食べて懇親を深める場になっている。
必要な作業を進めることはもちろん、作業をしながらの会話やその後のご飯などを共有することで関係性が生まれやすくなり、広場に主体的に関わってくれる住民のタネを発掘する重要な機能を果たしている。

イベント終了後は集合写真を撮るのが定例になっている

○現場運営サポーターズの立ち上げ
広場の現場運営に関わる意思のある方々に参加してもらうLINE Groupを立ち上げた。広場づくりの日（広場のメンテナンスをする共同作業日）やマルシェテントの設営・撤去、カレーの日の運営サポートなど、広場を運営し続ける上で欠かせないサポート人員を確保することを目的として

組織した。
広場で行われるカレーの日や広場づくりの日、オープンミーティングなどに参加したことがある方に限って招待することで、イメージのズレによる離脱が起きにくいように工夫している。こういった仕組みを導入することで、定期イベントを開催する際に既存サポーターズから興味がありそうな方々への声かけをしやすく、定期イベントへのリピート、サポーターズへの加入に結びついている。

○現場運営サポーターズご飯会
毎回作業をするのでは時間も長くなってしまうため、もっと気軽にカジュアルに参加できるご飯会も企画している。こちらはメンバー同士の関係性を育むことを目的としており、近隣団体から寄付してもらったお肉を焼いて食べるなど、不定期に開催している。

近隣団体から寄付していただいた鹿肉の会もおこなった（鹿肉は一度きり）

⑥課題を抱える子どもたちのケア
拠点開所後、しばらく経ってから広場によく来ている子どもたちのうちの何名かが不登校であったり、家庭で課題を抱えていることが発覚した。拠点スタッフとして子どもたちを気にかけたり、必要に応じて民生委員や学校などと連携しながら対応できたことで、子どもたちが潜在的に抱えていた課題への早期対応ができたといえる。日々の自然な関係性の延長線上で、子ども第三の居場所事業の目的の一部を果たすことができたと考えている。下記に、広場のスタッフが書いた具体的なエピソードをいくつかピックアップし、紹介する。（個人の特定ができないように、個人情報は除いている）

■親には見せなくても、広場を介して子どもの様子を見守れる
広場が開所してまもなくしてから遊びにくるようになった常連Bさん（当時4年生）。親御さんが、広場に遊びにきていた子どもたちの送迎をしてくれていたこともあり、親御さんとのコミュニケーションの機会も多かった。広場開所以降に家庭環境の大きな変化があったため、親御さんから依頼

を受けて、お子さんの振る舞いの変化がないか、お子さんが悩んでいないか、など特に気をつけてケアをした。広場で話した内容が全て筒抜けになってしまうとBさんの居場所を奪ってしまいかねないため、特に気になった言動にのみ絞り、親御さんと連携しながらケアを行った。
一時的に学校に行かなくなった際には、家にこもってしまって社会との繋がりが切れるのを防ぐために、学校の時間に広場にくるように促した。広場で他愛のない会話をしたり、気分が乗ったときに広場の作業を手伝ってもらったりする関わりをしばらく続けていると、気づくと学校に行けるようになっていた。（学校に行けば、などと促すような会話は意図的にしていない）

■親や友達に相談しにくいことも、誰かに話せたら気持ちが楽になる
焚き火が好きで広場に通うようになったCさん（当時5年生）。広場によくくるようになってからは、広場に遊びにくる小さい子たちのお世話を積極的にみてくれたり、遊びにきた人たちが広場で気持ちよく過ごせるように、草刈りや草花への水やり、掃除などをかって出てくれた。
日が落ちるのが早くなった冬場。暗くなるギリギリまで帰らず、焚き火の揺らぎを楽しみながら会話をするようになった。友達が帰っても、ひとり広場に残ることが多くなったので理由を尋ねると、家に居場所がないことを打ち明けてくれた。家庭環境の複雑さから、家に居場所を見出しづらく、できるだけ広場で時間を過ごしたい、とのことだった。親御さんとの直接的な繋がりはなかったため、引き続き広場に遊びにおいで、と伝えて様子を見守った。忘れた頃に、最近どう？と聞くと、なんのことか忘れるくらい関係が改善していたようで安心した。

■親との関係性・不安を打ち明けられる場所
小さな子どもと遊ぶのが大人顔負けに上手な常連Eさん（当時6年生）。平日週末問わず、よく広場に遊びに来ていて、広場にいる乳幼児の子たちが怪我をしないようにケアしながら上手に遊んでくれた。Eさんがいるからまた広場に来たいという子も出るほどの人気ぶりだった。
ある時から、週末の朝一から夜暗くなるまで広場に来るようになり、「子どもスタッフ」という仕組みも提案・運用してくれた。制度を作ってからは子どもスタッフとして、小さな子どもと遊んでくれたり、広場のメンテナンス活動を手伝ってくれたり、イベントの運営サポートをしてくれたりと、積極的に関わってくれるようになった。運営を手伝ってくれるようになってからは、スタッフとEさんだけのコミュニケーションの機会も多くなり、徐々にセンシティブな内容を話す機会が増えてきた。親との関係性についての思いや不安など、クリティカルな相談を打ち明けてくれたことを受けて、民生委員・学校につなぎ、児童相談所を介してしかるべき対処をしてもらった。学校の先生にも話していないタイミングだったため、早期に発見し、早期対処することができた。

■総括

2023年度までに積み重ねてきた子どもたちの経験の機会提供をつづけながら、定期イベント（マルシェ、カレーの日、オープンミーティング）をコツコツと積み重ねてきたことで、広場を介して生まれた関係性を深め、つながりの輪を広げられた年だった。運営自走に向けて、広場に主体的に関わってくれる住民をより広く募っていくことが最大のテーマであったが、新たにはじまった「広場づくりの日」や現場運営サポーターズ制度/子どもスタッフなどの仕組みと体制により、ボランティアによる持続的な運営の土台を築くことができたと考えている。また、日々の運営を通じて築いてきた子どもたちとの信頼関係は、課題を抱える子どもたちへの早期の気づきや対応につながる事例を生んだ。こうした実践は、この場が「第三の居場所」として重要な役割を果たしていることを示しているといえる。

助成期間終了後の運営体制として、この3年間の助成期間で築き上げてきた関係性を核に、持続可能な運営を議論できるチームを生み出せたことは大きな成果と考えている。本年度の経験を通じて感じたことは、続けることで深まっていくもの、新たに生まれてくるものがあるということ。その時々の最適な運営体制を模索しながら運営し続けることで、地域の老若男女、誰にとってもなくてはならない居場所になることを目指したい。